

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：34419

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2023

課題番号：20K22250

研究課題名（和文）学歴獲得の階層差生成メカニズムの解明

研究課題名（英文）Exploring Mechanisms of Educational Attainment Inequality

研究代表者

豊永 耕平（Toyonaga, Kohei）

近畿大学・総合社会学部・講師

研究者番号：90881037

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では学歴獲得に対する階層差が生じるメカニズムを解明するために、高校生とその母親1020ペアを対象としたアンケート調査と個票データから選抜した親子に対するインタビュー調査を独自に実施し、社会階層の2次効果と呼ばれる、教育選択の階層差が生じるプロセスを解明した。そのことで学歴獲得の不平等の生成メカニズムがマクロな社会構造に埋め込まれている側面を明確にした。本研究の成果は、『学歴獲得の不平等：親子の進路選択と社会階層』として勁草書房から刊行されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学歴は社会経済的地位を左右する重要な要因である。そのため、学歴獲得の機会が子どもの出自によって左右されるという教育格差の問題は深刻な問題である。従来の研究では学歴獲得には階層差が大きいことはよく知られていたが、それがどのように生じているのかというミクロなプロセスは十分には議論されてこなかった。こうした中で本研究は高校生とその母親を対象としたアンケート調査とインタビュー調査を独自に実施し、学歴獲得の不平等が生じるプロセスの一端を解明することに成功した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we conducted a survey of 1,020 pairs of high school students and their mothers, along with interviews with selected parent-child pairs based on questionnaire and individual data, in order to elucidate the mechanisms behind educational attainment inequality. We identified the processes contributing to social class disparities in educational choices, commonly referred to as the secondary effects of social stratification. The findings of this study have been published as 'Inequality in Educational Attainment: Parental Pathways and Social Stratification' by Keiso Shobo.

研究分野：教育社会学

キーワード：学歴獲得 高校生 進路選択 社会階層 不平等 混合研究 親子調査 格差・不平等

1．研究開始当初の背景

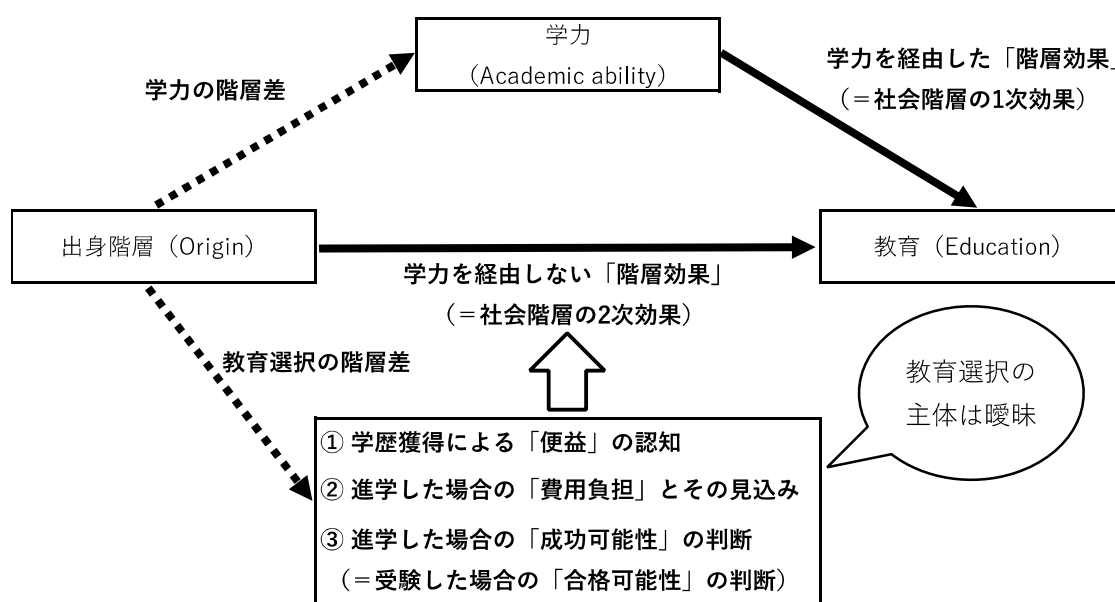
学歴獲得には「統計的に有意な階層差」があることが繰り返し報告されてきた。具体的には、両親が高学歴だったり、高所得だったりするような、恵まれた家庭の子どもほど高い学歴を獲得する確率が高い。こうした学歴獲得の不平等は、学力および努力の階層差（1次効果）だけではなく、同じくらいの学力でも生じる教育選択の階層差（2次効果）からも説明される。図1には子どもの出身階層が最終的な学歴獲得に影響する経路を分解して示した。

高階層の子どもほど学力が高くなりやすく、学力が高いことで学歴も高くなりやすいという経路を社会階層の1次効果という。それに対し、仮に同じくらいの学力であったとしても高階層の子どもほど大学進学を選択しやすいという経路を社会階層の2次効果という。しかし、日本の既存研究では前者による説明の方が注目されがちで、後者による説明は十分には議論されてこなかった。

社会階層の2次効果は、学歴獲得による便益・費用負担・成功可能性の判断には階層差があることから説明される。高階層の子どもや親ほど、仮に同じくらいの学力であったとしても、学歴獲得による便益を高めに見積もりやすく、進学にかかる費用負担や成功可能性に楽観的になりやすいので大学進学を選択しやすい。逆をいえば、低階層の子どもや親ほど、学歴獲得の便益を認めにくく、進学にかかる費用負担に悲観的になりやすく、大学受験して合格できそうかというような成功可能性にも悲観的になりやすいので、大学進学を選択しにくくなってしまう。

こうした中で日本では親職業というよりも親学歴の方が教育選択を制約しやすい、計量的な研究手法を用いて「学歴下降回避仮説に適合的と思われる変数間の関連」も繰り返し確認されてきた（荒牧 2016 など）。ところが、学歴獲得による便益や費用負担などの主観的な判断にはどのように親学歴差が生じているのかは直接的には検証されてこなかった。

図1：学歴獲得を出身階層が左右する影響経路の分解（豊永 2023：8頁）



2．研究の目的

本研究の目的は、社会階層の2次効果と呼ばれる、教育選択の階層差が具体的にどのようなプロセスで生じているのかを解明することである。教育選択の主体として親子を分離した2次効果の理論枠組みに立ち、社会階層論に基づく教育社会学の理論枠組みをミクロレベルの高校生の進路選択の場面にもそのまま持ち込み、「親が不在」だった高校生の進路選択の場面に親を登場させることで2次効果の生成過程を解明することを目指す。

3．研究の方法

本研究の方法は、高校生とその母親 1020 ペアを対象としたアンケート調査とインタビュー調査を独自に実施する量的・質的アプローチ（MMR: Mixed Methods Research）である。この調査データは首都圏・関西圏に居住する全日制高校1年～3年生とその母親を対象に実施した質問紙調査と、質問紙調査を踏まえて選抜した親子を対象にしたインタビュー調査から構成されている。首都圏・関西圏の都市圏に限定したデータという限界はあるが、2次効果が生じるプロセスを検証するために必要となる変数を親子それぞれに調査している特徴があり、親子セットの調査であるため、子どもには訊きにくい親学歴・世帯収入などの階層変数も母親に直接訊くことでより正確に測定できている。

高校生とその母親をセットに調査した質問紙調査は、イブソス株式会社が保有する「アクセスパネル」(1984年の住民基本台帳から抽出された全国規模の汎用抽出枠)から抽出している。具体的には、平成29年度の「学校基本調査」で都道府県別に集計された学年別生徒数(全日制)から首都圏(埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県)と関西圏(滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県)について生徒比率を算出し、その上で生徒比率に沿うように居住エリア・性別・学年による割り付けを行った上でインターネット配信・調査票発送を行うことで調査を行った。インターネット調査は2018年7月～9月に実施し、最終的に684ペアからの有効回答を得た。しかし、当初に予定していた目標サンプルサイズ1000ペアに到達しなかったため、2018年9月と2019年7月に郵送法による追加サンプル調査を実施し、2018年9月は184ペア(発送297ペア/回収率:62.0%)から、2019年7月は152ペア(発送421ペア/回収率36.1%)からの有効回答を得た。以上の手続きから質問紙調査は1020ペアからの有効回答を得た。

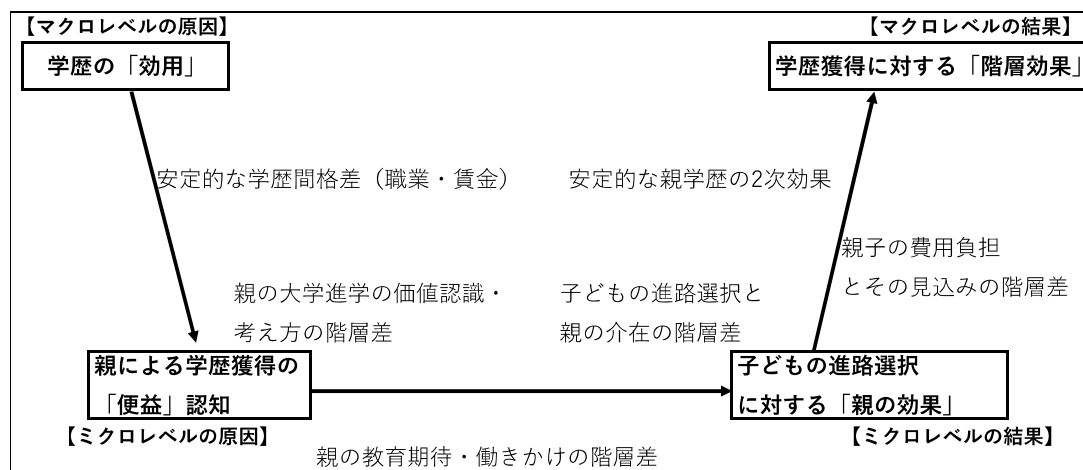
4. 研究成果

本研究による研究成果を図2に示した。学歴獲得による便益・費用負担・成功可能性の判断のうち便益については、日本では高卒と大卒の職業面・収入面の格差は常識的であるため、金銭的な便益の認知にはそれほど大きな階層差は確認できなかった。しかし、大学進学への価値は自分の経験を参照して評価されやすいため、親の非金銭的な便益の認知には階層差が生じやすかった。具体的には、高卒の母親は大卒学歴でないと成れない職業になるという就業面の便益のみを評価しやすいのに対し、大卒の母親は「大学で過ごす4年間」という非金銭的な便益を重視しやすかった。さらに費用については、既存研究が注目してきた所得階層が同じくらいでも高卒家庭の親子ほど進学費用を過大に見積もりやすく、所得階層だけではなく学歴階層によっても経済的な進学障壁が高くなりやすかった。加えて進学費用を親が負担することを当然視しやすいのは高学歴な家庭の親子であり、大卒家庭と比べて高卒家庭では乗り越えるべき経済的な進学障壁が高くなりやすくなりやすいなどの重要な知見が明らかになった。

こうした中で成功可能性の判断の指標である大学受験した場合の合格可能性にも格差が生じており、親学歴によって高校生の進路選択のロジックが異なっていた。具体的には、高階層の高校生は大学進学を当然視しやすく、大学進学は当然のこととして、どのような大学に進学するかを重視しやすい。それに対して低階層の高校生は、将来的になりたい職業や進学してからの勉強内容を重視して大学に進学するかどうか悩みにやすく、既存研究が想定してきた合理的選択論による進路選択の枠組みは低階層のロジックに親和的であることが示唆された。

以上のような研究成果は、学歴獲得の不平等が発生するメカニズムは、職業的スキルを要求しにくい新規学卒採用を基準とした日本の雇用慣行に埋め込まれていることを示唆する。特定の職業的スキルを要求しない職域が強すぎることで学歴獲得は訓練可能性としての意味を強く持ちやすくなる。そのことで高階層の高校生はやりたいことを棚上げして受験競争の中で加熱され続けることになるが、それと同時にジョブ型雇用的な職域が弱すぎることで学歴獲得は人的資本的な意味を持ちにくくなる。結果的に職業との結びつきから学歴獲得を評価する低階層の高校生を不利な立場にしてしまう。このように本研究は、マクロな労働市場の構造とミクロな教育選択のプロセスを接続して理解することに大きく貢献した。

図2：本研究の研究成果(豊永2023:343頁)



参考文献

- 荒牧草平, 2016, 『学歴の階層差はなぜ生まれるか』勁草書房。
 豊永耕平, 2023, 『学歴獲得の不平等：親子の進路選択と社会階層』勁草書房。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 豊永耕平	4. 巻 33
2. 論文標題 高等教育の大衆化と大学進学の不平等：社会階層・学業達成がもたらす影響力とその変化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 年報社会学論集	6. 最初と最後の頁 61-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 豊永耕平
2. 発表標題 高卒後進路の費用負担と親学歴
3. 学会等名 第72回日本教育社会学会大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 豊永 耕平	4. 発行年 2023年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 432
3. 書名 学歴獲得の不平等：親子の進路選択と社会階層	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------